

## 歴史の

## 江戸騒乱

— つかんだ

特ダネ —

(一八六七年)

1

慶応三(一八六七)年十一月、江戸市民たちは、たびかさなる強盗事件におびえていた。

「さあさ、お立合い、聞いとくんせえ。またまたのご用盗事件だよ、ときは十一月十四日、所はお江戸の日本橋、お上の御用商人『播磨屋新右衛門』に、二十人ばかりの黒装束、黒頭巾の盗賊が押し入った」

半ば読みつつお客をつかむ「読み売り」である。

「またかよ」「いくら盗られたんだい」の声がとんだ。

「盗賊はだ、『天下万民のため世直しを行うにつき、ご用金を納めよ。騒ぎだてせねば、手荒らはいたさぬ』と、刀でおどしてまきあげた御用金、さあいくらだ？ なんとなんと、肝をつぶすな、お立合い。神武以来の新記録。……

さすがはお上の御用商人だ。わしらが夢にもお目にかかれねえ千両箱を、いくつお蔵にためこんでいたか。これを知らなきや江戸っ子じゃねえ。さあさお立合い、江戸っ子だ

つたら買っとくれ」

「読み」と口上は亀蔵おじさんと、少年巳之吉はその脇で「売り」が仕事だった。「読み売り」は、ニュースを急いで木の板に絵と文字を彫って手刷りした新聞で、街頭で読みながら売る。後に「瓦版」ともいった。

数日後にも事件が発生、またも被害記録は更新だ。

「さあさお立合い、先の播磨屋がまきあげられた被害額、おぼえてますかえ。そうそう一万五千両だった。ところが上には上があるものよ。幕府の年貢米を扱う『伊勢屋』では、なんとなんと三万両。おっと、お立合い、たまげてよいが気絶はするな。御用商人ばかりでない。あんたの周りにも押し込みは起きてござる。花のお江戸がこれでは困る。さあさ、これ読んで知恵出しとくれ」

そのうち、火付け事件まで起こったから、ますます市中は騒然となった。巳之吉は江戸っ子だ。「読み売り」の刷りや売りの手伝いだけではおもしろくない。

——よし、おれさまが犯人をつきとめてやる。犯人が分か